



# 新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS



## 第 11 回新藤兼人賞

2006年12月8日（金）東京會館 11階 ゴールドルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：富士フイルム株式会社／報映産業株式会社

協賛：松竹株式会社／東宝株式会社／東映株式会社／角川ヘラルド映画株式会社

コダック株式会社／株式会社ペイ・パー・ビュー・ジャパン／株式会社 IMAGICA

SARVH 賞提供：一般社団法人 私的録画補償金管理協会

## 金 賞

マキノ雅彦『寝ずの番』監督



**受賞者プロフィール** 1940年生まれ。京都市出身、津川雅彦。母の父が“日本映画の父”といわれる牧野省三、兄が俳優の長門裕之、父方の叔父が加東大介、叔母が沢村貞子、母方の叔父がマキノ雅弘監督という文字通り芸能人一家に育つ。沢村マサヒコという名で5歳で映画出演したのがきっかけで、その後加藤雅彦としても大映映画に出演。正式な主演デビュー作は代表作でもある56年日活映画「狂った果実」。以来俳優として実績を重ね、敬愛する伊丹十三監督作品で立続けに各賞の助演男優賞を総なめにしたほか、「墨東綺譚」「集団左遷」「プライド」等数多くの話題作で日本アカデミー賞をはじめとする映画賞で主演・助演男優賞に輝いている。現在、東京フィルムセンター・スクール・オブ・アート専門学校の校長として若き活動屋達を育てている。

## 銀賞

荻上直子『かもめ食堂』監督・脚本



**受賞者プロフィール** 1972年生まれ。千葉県出身。千葉大学工学部画像工学科卒業。94年に渡米し、南カリフォルニア大学大学院映画学科で学ぶ。01年帰国。第23回ぴあフィルフェスティバル／PFFアワード'01で音楽賞を受賞。デビュー作「バーバー吉野」（03）でベルリン国際映画祭児童映画部門特別賞を受賞し、注目される。04年には2本目「恋は五・七・五！」が全国公開された。テレビドラマの脚本に「サボテン・ジャーニー」（04日本テレビ系）、「やっぱり猫が好き 2005」（05年フジテレビ系）がある。

## SARVH

### プロデューサー賞

渡辺 謙 『明日の記憶』 エグゼクティブプロデューサー



#### 受賞者プロフィール

1959年、新潟県出身。上京後、劇団“円”に参加し、研究生ながら蜷川幸雄演出の舞台「下谷万年町物語」で主役に抜擢され注目を集める。82年にドラマ「未知なる反乱」(TBS)でTVデビューをし、87年『独眼竜政宗』で不動の人気を確立した。映画では『瀬戸内少年野球団』(84)でデビューを果たした後、『タンポポ』(85)、『海と毒薬』(86)、『幕末純情伝』(91)、『絆—きずな』(98)、『スペーストラベラーズ』(00)、『溺れる魚』(01)、『陽はまた昇る』(02)、『T. R. Y』(03)、『新・仁義なき戦い／謀殺』(03)、『北の零年』(05)などに出演。

トム・クルーズと共演した『ラスト サムライ』(03)で第10回俳優組合賞、第61回ゴールデングローブ賞、第76回アカデミー賞助演男優賞にノミネートされた。その後も、『バットマン ビギンズ』『SAYURI』とハリウッド大作に出演、12月9日公開のクリント・イーストウッド監督作品『硫黄島からの手紙』では主人公を演じ、名実共に日本を代表する俳優の一人となった。

2004年『SAYURI』の撮影中に会った原作。「つらい病気がテーマだが、読み終わってとても温かいものを感じた。すぐに映画にしたいと思って面識のなかった作者に手紙を書いた」自ら映画化の企画を進め、エグゼクティブ・プロデューサーを務めた。

---

#### 審査員講評

---

#### 金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：李 鳳宇 (シネカノン)

本年度の新藤兼人賞は5人の審査委員で選考し、長い議論の末「寝ずの番」、「かもめ食堂」、「ヨコハマメリー」、「佐賀のがばいばあちゃん」と4本の映画を中心に話し合われました。100本を超える映画が対象となった今年の審議を通して感じたのは、今年はテレビドラマを中心に活動をして来た監督が大変多くデビューした年だということと、ご当地の観光課やフィルムコミッションを巻き込んだ地方発信の映画作りが邦画のひとつの潮流になりつつあるという現実です。この傾向は来年以降も暫く続くでしょうし、日本映画の作り手と作り方は以前にも況して様変わりしていくだろうと予想されます。これからもテレビ局各社はこぞって映画を製作し続けるでしょうし、テレビドラマの演出家が映画監督になれるチャンスは限りなく増えて行くでしょう。そんな現状認識も踏まえて、選考委員達は皆一様に大変難しい原案から完成度高い娯楽映画を仕上げ、映画のプロモーションにも大変精力的に参加なさった津川雅彦さんことマキノ雅彦氏を金賞に値する監督であると判断しました。この決定の陰には今後もマキノ監督に、真の映画の現場を知る映画監督として、演出家の仕事を続けて欲しいという審査員の一致した願いが込められています。一方「かもめ食堂」を監督なさった荻上直子氏は映画によって独自の世界を作り出し、観客に驚きと癒しを与える特異な才能を評価しました。いずれにせよ、日本映画が年間400本以上公開され、映倫審査に掛からない公開映画も含めると700本近くの映画が製作される現状で、来年以降も「新人」をいかに評価するかは大きな課題として浮上してくると思います。

### 佐々木史朗（オフィス・シロウズ）

映画作品としての魅力や監督としての可能性を予想するのはほんとうに難しいことです。セオリーでいえば型破りでありながら、とんでもなくチャミングであったり、新人らしからぬ端正な仕上がりの作品を見ると心が迷うのですが、俳優としての数々の実績を示してこられたマキノさんの映画が日本映画の正統である悲喜劇であったことには驚きもし、勇気づけられました。

### 安田匡裕（エンジンネットワーク）

新藤兼人賞の選考をするプロセスで毎年同じことを思う。どうしてこんなにもどこかで似たような映画ばかりなのだろうか。新人監督の企画演出技法はもっと異端であっていいのではないかと思うのは私だけだろうか。そういう意味でマキノ雅彦監督『寝ずの番』、荻上直子監督『かもめ食堂』はまさに異端であり、ゆえに際立っていたように思う。この異端さにこそ、これからの新しい日本映画の風を私は感じる。さまざまな映画が過去に作られ、あらゆる題材はすでに手垢にまみれていると考えるのは早計で、まだまだ未発掘な題材や表現がきっと眠っている。これからの新しい監督にはその未開のゾーンを目指して欲しいものである。過去に「私の作るものは異端だ!」と思わせてくれた監督の李相日、西川美和は今年度の日本映画の傑作『フラガール』『ゆるる』を発表した。この二人が過去の新藤兼人賞受賞者であることはいうまでもない。

### 三宅澄二（ミコット・エンド・バサラ）

マキノ監督、荻上監督おめでとうございます。今年は過去最高となる100作品以上が対象作品となりました。新しい監督のチャレンジの場が増えていることは、歓迎すべきことだと思いますが、ビジネスとして見た場合の危うさもでてきているように思います。そういう意味では今回、新藤兼人賞のメインテーマである‘プロデューサーとして組みたい監督’という視点を再度意識して選考にあたりました。マキノ監督は映画でしかできないテーマに果敢にチャレンジされ、パワー溢れる作品に仕上げられ、しかもご自信自ら徹底した宣伝活動をされていたこと、また、荻上監督はフィンランドをロケ地に選ばれ、その空気感と3人の女優さんの存在感を見事に切り取られていました。その結果、タイプは全く違いますが観客に受け入れられ、単館拡大という決して低いハードルではない公開形態で、ヒットさせられたことは特筆に価するものだと思います。

### 奥田真平（オンリー・ハーツ）

『かもめ食堂』を推しました。国や文化の壁を軽々と越えていく身のこなし。そこではムーミンとガッチャマンが、おにぎりどケーキが気楽に共存しています。風通しのいい透明感。乾いているが冷たくはなく、鮮やかだが派手では

ない、節度ある自由という感覚が伝わってきます。自然に身をゆだねながら自立している。孤独を恐れず人をそらさない。そんな人間のありようをユーモラスに表現しています。演出家としての技量以前に監督の感受性に共鳴しました。『寝ずの番』は下ネタではじまり下品に堕ちない。長門裕之演じる落語家のなんと魅力的なことか。役者も演出も奔放で観ている側もなんだか楽しくなってくる。ちょっと暑苦しいけれど洒脱な映画です。次に何をするのかわからないような監督の人生の幅に魅力を感じました。『ヨコハマメリー』にはアツといわされましたが、ドキュメンタリーを受容し企画する力量がこちらにないためコミットできませんでした。個人的には『ストロベリーショートケイクス』『ハチミツとクローバー』『初恋』『好きだ』が上記3作に続く次点といったところです。それぞれ女優の旬の魅力をうまく引き出していたと思います。

## SARVH プロデューサー賞選考委員講評

### 安田匡裕（エンジンネットワーク）日本映画製作者協会 理事

今年度は渡辺謙氏を推しました。この賞は年間で最も優秀な作品の完成に大きな貢献を果たしたプロデューサーまたは企画者に贈る賞ですが、渡辺謙氏のものした『明日の記憶』は、この賞の主旨にかなう清風を吹き込んでくれたものと思います。いわずとした渡辺氏は海外にもその活躍の場を広げる俳優です。その彼が原作に魅せられ、映画化権の取得、配給の交渉、キャスティング、監督の選定という実を伴ったプロデュースを、自ら主演もこなして成し遂げました。今日、若者向けの恋愛映画が量産されるなか、大人の鑑賞に耐える大人の愛の物語を製作し、ヒットさせたことはたいへんに意義深いと考えます。そしてかなうことなら、また近いうちに渡辺謙プロデュース作品を見せていただきたいと思います。

なお選考にあたり、『寝ずの番』『花田少年史』とサイズの違うそれぞれの映画をヒットさせた鈴木光氏、『明日の記憶』『男たちの大和/YAMATO』で映画会社としてのスタンスを鮮明に打ち出して成功させた坂上順氏、『涙そうそう』の進藤淳一氏が、ぎりぎりまで私のなかで印象に残るプロデューサーであり、悩ましかったことを申し添えます。